

編集後記

むなかた電子博物館 紀要委員会

編集長 宮川 幹平

2013年は、展示施設を持たない仮想空間の博物館として異彩を放ってきた「むなかた電子博物館」の新たなスタートの年である。その詳細や今後については別稿に譲るとして、ここではむなかた電子博物館が発行する紀要の役割と位置付けについて考えてみたい。

本紀要是、電子博物館の名に恥じぬよう、創刊号から完全にデジタル化され、むなかた電子博物館内の常設コーナー (<http://d-munahaku.com/culture/kiyou/index.html>) から自由に閲覧できるようにしている。また、デジタル化による編集作業の効率化やコスト削減にも取り組み、執筆者や編集者間におけるデータのやりとりや共同作業等は、クラウド化の恩恵を十分に受け、順調に効率化が進んでいる。しかしながら、純粹に本紀要を論文誌とみたとき、デジタル化によって何が得られるのかという点において、まだ改善の余地は大きい。すぐに思いつくのは、ハイパーテキスト化によって参照性を高めることであり、これは今号を含め、順次対応を進めている。今後は、画像やサウンド・ムービー等の各種メディアを組み合わせながら、本紀要に収録された論文や研究資料がより多くの人の目に止まり、「むなかた」をテーマとしたコミュニケーションの素材（話の種）となるような紙面構成や公開方法を意識していきたい。そのためにも、より多く幅広い分野の方からの論文・研究資料の投稿をお願いしていく所存である。そのほか、地域に根付いた電子博物館であるからこそ、デジタルデバイドの問題にも取り組んでいかねばならない。それも、単に紀要冊子体を継続して発行していくことだけでなく、デジタル媒体だからこそできる、万人が利用しやすい表示形態（ユニバーサルデザイン）の具現化を検討していきたいと考えている。本紀要が、これから的新しい時代に相応しい新しい論文誌という個性を示すことができるか、是非ご注目いただきたい。

最後に、今号を以て5号目を数える本紀要是、多様な論文や研究資料をご投稿頂いた方々は勿論のこと、本紀要の編集や発行に関わって下さった多くの方々のご尽力によって支えられてきた。ここに深く感謝申し上げる。